

開催地名：石川県小松市	
開催日時	令和4年9月18日（日） 13：30 ～ 15：00
開催場所	こまつドーム
語り部	草 貴子 （宮城県仙台市）
参加者	小松防災士の会 41名
開催経緯	<p>当市では、大規模災害は発生自体が稀有であることから、個々の実体験から対策を立てることが困難となっている。</p> <p>一方で、近年では能登地方での地震が多発しており、大規模災害を想定した訓練等の実施が重要であると考えられる。今回の東日本大震災の語り部による災害伝承の講演をはじめとし、新たな知見を取り入れながら、防止全般に対する備えを推進していきたい。</p>
内容	<p>（1）震災時の宮城県仙台市泉区について</p> <p>私が住んでいる、仙台市泉区東部に位置する市名坂東町では、平成20年に女性が中心となって町内会を設立した。特に防災に力を入れており、平成22年に完成した集会所は、災害時に避難場所として機能する施設を意識して設計された。復旧の早さを考えたオール電化の施設で、障害者用を含め2か所のトイレを設置するとともに、必需品一式の備蓄など、災害時でも普段通りの生活を送れる準備を行っていた。</p> <p>（2）当日の状況と避難生活について</p> <p>震災当日、私は小学校の卒業式に出席していた。その後、家電量販店での買い物中に被災した。立ってられないほどの強い揺れが襲い、店内はガラスの割れる音や悲鳴が響いていた。外では周囲の電柱が倒れそうになり、車が上下に大きく動いている恐ろしい光景が広がっていた。泉区は内陸のため、幸いなことに津波被害はなかった。集会所には女性や子供など100人が避難し、町民でない方も受け入れた。</p> <p>その後、避難者の中からリーダー・サブリーダーを決め、町内会は補佐に回る体制を整えた。避難生活中は毎日温かいコーヒーを淹れ、全員と会話で交流を図った。電気は2～3日、水道は3～4日、ガスは1か月程度で復旧した。子供たちは、区役所で得た給水車などの情報を瓦版にし、町内へ広報を行った。高校生は子供たちの勉強サポートや、子守を担当した。各自が率先して協力しながら避難所解散までの日々を過ごしたが、避難生活は誰もが初めての経験だったため思わぬトラブルも多く、想定不足を強く感じた。</p> <p>（3）東日本大震災から得た教訓と新たな取り組み</p> <p>防災のためには規則・訓練・備蓄は大切なことであるし、想定外の事象について考えることも重要だ。だが、決まりや子供・男女などの属性にとらわれず、ひとりひとりが「私の役目とは何か」という想いを持って行動することが非常に重要であると強く感じた。それは、「1000年に1度」と言われる大震災の中、それぞれが自分の役割を懸命に果たしたことで、厳しい現実を乗り越えることができたからだ。</p>

避難所の解散後、私は町内会に所属していない人たちを対象に、災害から守る対策を始めた。加入は任意とはいえ、町内会に入っていない人が被災時に支援を受けられない事態があってはならない。主に行ったのは、マンション住まいで未就学児がいる若い家族を対象とした育児支援と、「おもちゃ図書館ずんだっこ」の開設である。

完璧な答えを出せないとしても、お互いが知恵を出し合うことでその過程を大切に、少しでも前に進めていきたいと思っている。これらの活動が功を奏し、町内会への入会者は増加した。

#### (4) 今後の展望

災害はいつ発生するかわからない。だからこそ、いかなる時も仲間と自分を信じ、地域と歩んでいけるように備えることは重要だ。私は自身の役目を考え、平成 25 年に地域の組織団体と「避難所運営委員会」を作った。現在、初代事務局長として防災活動の充実と地域への理解を広めるため、この取組を強化していきたいと思っている。そして、東日本大震災だけでなく、あらゆる災害がもたらす悲しみや苦しみ、辛さに、自分だけでなく、家族や知人が巻き込まれたりしたらと考えてみてほしい。そして、そのような事態にならないよう、防災・減災に対する心構えを大きく保って生活してほしい。是非そのような観点で災害に対して考え、準備する気持ちを持っていただきたいと切に望んでいる。



開催地より

様々な人の視点で考えることが、より良い防災対策に繋がっていくのではないかと感じた。また、自分にできることは何かを考え、当事者意識を持って日頃の防災活動に取り組んでいきたい。当市としては、自主防災組織や女性（婦人）防火クラブの加入促進キャンペーンの実施と、「自分の地域は自分で守る」という認識の普及について、特に強化していきたい。